

茶路川筋のアイヌ語地名

第1回

白糠町には古くからアイヌの人たちが住み、豊かな自然やその恵みとともに独自の文化を育んできました。その中で最も身近なものが、普段私たちが使っている地名であり、町内にある地名の多くはアイヌ語に由来しています。

今回は、昨年度紹介した「海岸筋」の地名に続き、北海道横断自動車道（道東道）白糠インターチェンジ開通に向けて、「茶路川筋」のアイヌ語地名について、地名の由来やその土地にまつわる話題とともに、茶路川をさかのぼりながら紹介します。

①キラコタン

白糠村時代の歌人・郷土史家小助川濱雄は、著書『釧路国蝦夷時代史』の中で「地名又は山川の名称は、決して無意味につけられたものではない。天然物の観察に鋭敏な素質をもったアイヌは、つとにこれを観察して、その地方における風物なり、地勢なり、歴史なり、人間の感情なりを含ませて、これを称えた」と記しています。

このように、アイヌ語地名には、土地のようすや生活に必要な情報に加え、古くからその土地で暮らしてきたアイヌの人たちの思いと知恵が込められています。

「キラコタン」は、西茶路地区にある「キラ（逃げる）・コタン（村）」という意味のアイヌ語地名で、昔、津波が襲来したとき、海岸沿いのマサルカから村をあげて逃げてきたところからその名がつけました。

2006年（平成18年）、釧路地方気象台は、釧路・根室地方のアイヌ語地名をもとに『アイヌ語地名からみた500年間隔地震津波の影響』という調査を実施しました。

調査では、本町のキラコタンの

ほか、鶴居村のキラコタン岬や厚岸町の床潭など7カ所について、文献や現地状況の考察し「地名の由来が確実に津波の影響と考えられたのは、白糠町のキラコタンである」とまとめています。



▲『農業発祥の地碑』左側の石碑には、開拓者11人の名前が記されている

◆『農業発祥の地』

キラコタンは、白糠町の『農業発祥地』でもあります。1985年（昭和60年）に建てられた記念碑には次のように刻まれています。「本町農業は、明治十九年（1886年）谷口峰吉氏による開墾を始祖とされる。氏は農業を目的に福岡県志摩郡藤原村より移住し、キラコタン一番地に入地、大木蒙した未開の地に鋤を下した。その後農業は、明治三十年、殖民地区画の測設と、入植により、

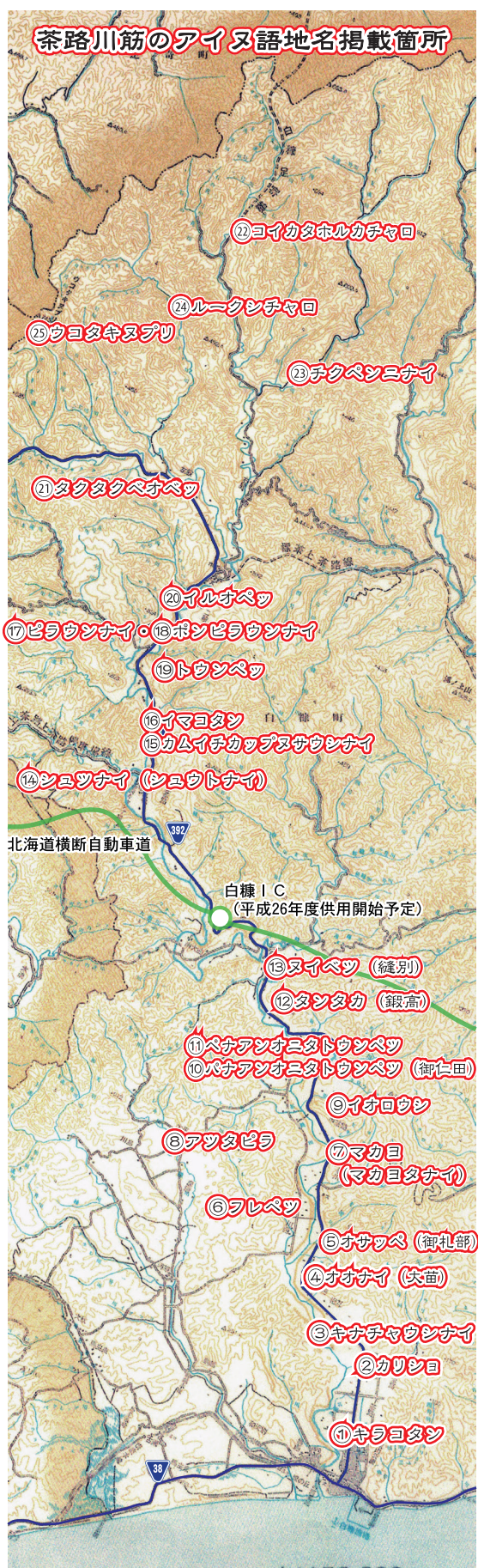


▲旧国鉄白糠線跡とカリシヨ川の交点を、今も残る鉄道橋から撮影

■茶路川筋のアイヌ語地名

- ① キラコタン
- ② カリシヨ
- ③ キナチャウシナイ
- ④ オオナイ（大苗）
- ⑤ オサツペ（御礼部）
- ⑥ フレベツ
- ⑦ マカヨ（マカヨタナイ）
- ⑧ アツタピラ
- ⑨ イオロウシ
- ⑩ パナアンオニタトウンベツ
- ⑪ ペナアンオニタトウンベツ（御仁田）
- ⑫ タンタカ（鍛高）
- ⑬ スイベツ（縫別）
- ⑭ シュツナイ（シュウトナイ）
- ⑮ カムイチカプヌサウシナイ
- ⑯ イマコタン
- ⑰ ピラウンナイ
- ⑱ ポンピラウンナイ
- ⑳ イルオベツ
- ㉑ タクタクベオベツ
- ㉒ コイカタホルカチャロ
- ㉓ チクペンニナイ
- ㉔ ルークシチャロ
- ㉕ ウコタキヌプリ

『茶路川筋のアイヌ語地名』25カ所を、今から順に紹介します。また、場所については、左の図面を参照してください。



ちなみに永田方正は『北海道蝦夷語地名解』で「曲磯？」と記し、1950年（昭和25年）に発刊された旧『白糠町史』には「？狩所ではないかと思われる」とあります。どちらも「？」がつけられているくらいですから、解釈しきれなかったようです。その点で、貫塩工カシの解釈は、言葉はもちろん、アイヌ民族の生活や現地のようすを知り尽くした工カシだからこそできたものと言えます。

◆加里庶炭鉱

「加里庶炭鉱」は1914年（大正3年）に開かれた炭鉱で、第一

次世界大戦末期の1919年（大正8年）、開北炭鉱株式会社が買収してからは、白糠駅まで専用線路を敷いて根室本線への引込線を設けるなど、戦争景気の中、白糠炭田の最盛期を象徴する存在でした。終戦後の不況で閉山が相次ぐなかでも一定の出炭量を確保していました。1938年（昭和13年）に閉山しました。

太平洋戦争後の1957年（昭和32年）、釧路埠頭株式会社によって再び開坑しましたが、2年間で閉鎖されています。

【参考文献】叢書しらぬか第5巻『白糠炭田に灯は消えず』